

ペニー本は「不道德」か？： 初期近代イングランドの民衆出版物に見られる性道德

佐藤 和 哉

はじめに

1795年3月にハンナ・モア（Hannah More, 1745～1833年）は『廉価版道德叢書（*Cheap Repository Tracts*）』を刊行するが、その出版主旨説明書のなかで「卑俗で淫らな出版物を通じて〔民衆に〕流し込まれている害毒」に対する「解毒剤」としてこの叢書を発刊すると述べた¹⁾。モアによれば、そのような出版物は、「安さのためだけでなく…不幸なことに下賤な趣味によく合っているために、身分の低い者どものあいだでけしからぬほどの人気である。…がさつで汚れた言葉づかいは冒瀆的で下品な唄や安物の本に見られ、イギリス中の大小の町や村で行商人によって売り歩かれている」ということであり、その「安さ」および「行商人によって売り歩かれる」という販売形態から判断して、ここでモアが攻撃の対象にしているのがペニー本であることは間違いない²⁾。同様の記述はその前年に、ポーティウス主教がモアにあてて書いた手紙の中にも見られる。「〔ロンドンでは〕いくつかの本屋が、あなたのおっしゃる行商人や物売り、マッチ売りの女たちのように、罪深い仕業を犯すのに中心的な役割を果たしています。この本屋は、およそ考えられる限りもっとも下品な安い本を貧民たちに売りつけていて、この類の商売からどれほど多額の金が稼ぎ出されているのか、信じられないほどです。それから、下層の連中が大勢で群れをなしてそういう店に押しかけ、おぞましい安本を買うかということも聞きました。」³⁾

これらの史料の書き手たちの関心事は、民衆がこぞって読む本がいかに「冒瀆的」で「下品」であるかを告発し、それを社会問題としてとらえることにあるわけだから、モアやポーティウスの目に映ったこの「社会問題」が民衆の読書体験をどこまで正確に反映したものかという点には、疑念が残らないではない。しかし、それに対抗するために発刊された『廉価版道德叢書』がきわめて成功した企画であったことを考え合わせれば、モアの抱いていた危機感は、支持者のあいだで広く共有されていたと判断してよいだろう。正しい認識であるかどうかは別にして、その多くが福音主義者である中流階級出身の社会改良家たちは、民衆がペニー本を廉価にかつ大量に入手して読んでいたと捉えており、そういう本の内容に強い嫌悪を示していた。

だが、ここで問題とされなければならないのは、本当にペニー本は「冒瀆的」で「おぞましく」「下品」なのか、ということである。『叢書』をペニー本そっくりの体裁や装丁、挿絵で刊行する、という戦術で民衆へ普及させようとしたことを考えあわせれば、モアがそのような観点からペニ

一本を「研究」したことは間違いない。しかし同時に、その内容については、強い偏見と先入観を持って読んであろうことも想像に難くない。「民衆」の読書体験を多少なりとも明らかにするためには、ペニー本を詳細に読み、そこにどのような価値意識が表されているかを検討する作業が必要である⁴⁾。一言で価値意識と言っても、秩序、体制、人間関係などいろいろな対象が考えられるが、モアの言葉のなかに「卑俗」や「淫ら」という表現が頻出することから、当時、性に関するペニー本の意識が問題視されていたのが伺える。そこで、ペニー本における価値観のありかたを探る試みの一部として、本稿では、性道徳と性役割、たとえば結婚生活における夫婦の力関係や両性のあるべき役割という観点からペニー本を見ることにする。そこに表される道徳観念が「冒涇的」「下品」と一括りにされうるような単一の相を呈して、当時の「上品な文化 (polite culture)」と対立していたかを検討するのが本稿の課題である。

ペニー本の検討に先立って、比較の対象となる、中上流階級の性道徳・性役割に関する意識について簡単に見ておくことにしよう。まず、「血統の混乱は犯罪中の犯罪である。したがって、結婚の誓言を破るのでも、男より女の方がはるかに罪が重い」というジョンソンの発言に端的に表れているように⁵⁾、遺産相続に関して嫡出の正当性が問題となる階級において、結婚外の性行動に関するダブル・スタンダードは当然であった。当時の史料にも歴史家による研究にも、これに関する言及は枚挙に暇がないが、18世紀社会史のスタンダードとなっている概説書のなかで、ロイ・ポーターは、「上流社会にあっては、女性は結婚前の貞節と結婚後の評判がきわめて大切である、とジェントルマンたちに思われていた」と述べている⁶⁾。また、こういう女性観は、当時の大多数の女性思想家 (ウルストンクラフトは顕著な例外である) たちにも共有されていて、『青鞥たち』も、高潔なたしなみの心から、男に劣らず、女性の貞節と服従を当然のこととと思っていた⁷⁾。言うまでもなく、モアもこのグループに属すると考えてよい。性役割の点でも、女性が男性に能力的にも道徳的にも劣るものとされ、したがって服従的な地位・役割を持つべきである、という考えかたが一般的であったことも、前提としてよいだろう。

以上のようなポライト・カルチャーにおける女性観を前提として、以下ではペニー本の性道徳や性役割に関する規範意識との類似点や相違点を検討する⁸⁾。この検討を通じ、ペニー本に表れる結婚や男女のありかたが、一通りに捉えられるものでもなければ、それらが必ずしもポライト・カルチャーの道徳観念と衝突するようなものでもなかったことを検証していく。

1. 「笑い話」のテキスト

最初に検討するテキストは、『不埒なトム、または仕立屋トム・スティッチの愉快的物語』という本のダイシー版である⁹⁾。これはペニー本にありがちな、いたずら者を主人公とした笑話集で、24ページずつの二冊本となっている。行論の都合上、始めにあらすじを述べる。

仕立屋ジョナサン・スティッチの息子トムは、やはり仕立屋の徒弟となる。親方の妻が徒弟たちにひどく辛くあたるので、トムが復讐する機会を狙っていたところ、このおかみが娼館で客を取っていることを見つけた。トムは客に成り済ましてその正体を探り、それをネタにして親方の妻を脅し、肉体関係を重ねる。この関係はやがて親方の知るところと

なり、その時は罰を免れるものの、親方の妻の死後トムはこの家を追い出される。ロンドンを離れたトムは、リーズのある未亡人の家に世話になり、金銭的な援助を受けつつこの未亡人と結婚の約束をして、居候を決め込む。そのほかに16週間のうちに16人の乙女と結婚の約束をエサに性交渉を持ち、全員を妊娠させる。全員の女性から金銭を詐取したあと、結婚式を密かに挙げるためと言って町はずれに呼び出し、乙女らと未亡人がそこに向かうあいだにリーズを逃げ出す(以上、第一部)。

追跡を恐れたトムは女装して女子寄宿学校の女中として雇われ、ほかの女中や数人の女子生徒と関係を持ち、女生徒たちの妊娠によって自分の正体がばれそうになると、そこからも逃げ出す。トムが野宿をしているところの近くの川に娘たちが体を洗いに来たのを覗き見て、その娘たちを脅かして裸のまま追い返し、残していった着物を持っていく。翌日出会った鋳掛け屋と情婦にその着物を叩き売ったうえ、二人を酔いつぶしてその女が貯め込んでいた金品を巻き上げたりもするが、やがて金を使い果たしてふたたびさすらいの身となる。ある金持ちの家に泊めてもらうことになり、幽霊が出るという部屋に泊まったところ、木のこすれる音が幽霊だと誤解されていたことを知る。そこで幽霊のふりをして人びとを追いかけまわし、金を奪う。翌朝、自分も幽霊に脅かされた、と何食わぬ顔をして語るところで話は唐突に終わる(以上、第二部)。

物語としてはこの話は不完全で、きちんとした終わりがたをしていない。雑多にくり返されるエピソードの一つが終わったところで唐突に物語は終わっていて、その後トムがどうなったかについて、「語り手」はまったく興味を示さない。これは、短いエピソードをつなぎあわせて成り立っているこの物語が、「読み上げられる印刷物」としての性質をもっていることを示している。こういう物語(特に笑話)は、仕事が終わったあとなどに人びとが集い、おしゃべりする場で読み上げられることが多く、そのグループの中の「読み手」はきりのよいところで中断したり読むのを止めたりできる。ここで、トロワの青本が読まれる場としてロベール・マンドルーが「夜の集い」について述べた一文を思い出しておくのは有益だろう。マンドルーは、「こうした小冊子が大成功を収めたのは、目で読まれるためでなく、声を出して読まれ耳で聞かれるようにつくられていたからである」と説明している¹⁰⁾。『不埒なトム』に話を戻すと、その一方で、第一部の終わりには唐突に「語り手」が顔を出し、「トムの面白おかしい行状について、本人から知らせがあったので」話を続けることにする、と述べて第一部と第二部をつなぐ体裁を整えている(part 2, 2 3)。したがって、この点でこの本は口承(耳から伝えられる)の語りとしての性格と、文字(読まれることによって伝えられる)の語りとしての性格の両方を持っていると言える。出版社に雇われている書き手に話をまとめあげる能力がなく、規定のページ数になったところで話を唐突に終わらせざるを得なかった、という可能性もあるが(売り歩くという販売形態の都合上、ペニー本は厚さの点で制限があった。多くは16ページか24ページである)、おそらく読者=聴衆からは、類話と同じように、一人の登場人物が繰り広げるエピソードの繰り返しであるので首尾一貫している必要はないと認識されていたのだろう¹¹⁾。

この物語の最大の特徴は、女性全般がトムの金銭欲か性欲か、いずれかの欲望の対象としてしか登場しないことにある。この物語では、女性は金銭をだまし取る相手としてか、またはトムの

性欲の対象としてしか見られていない。また、トム「男性性」は子どもを作る能力として表現され、ユーモラスな誇張によって強調されている。男性性の優位を物語中で繰り返し確認する「語り」が持つ女性に対する態度は、女性を劣った存在であるとする点で、先に見たようなポライト・カルチャーの女性観と何ら違いはない。その点で、ポピュラー・カルチャーのアイテムであるペニー本の道徳観は、ポライト・カルチャーとの間にそれほど距離を持たないのかもしれない。

しかし、そうだとすると、婚前の性交渉によって女性が妊娠した場合に、その行為が相手の男性に何の責務も負わせなかったわけではない。「結婚の約束をエサに女性と肉体関係を持ち、女性が妊娠したにも関わらずその約束を反古にして逃げる」という行為が、性に関する当時の一般的な道徳観に違反していたのも確かである¹²⁾。このような場合、女性や女性の親族は違反者に対して結婚の履行を迫ることができ、このような行動は社会的非難を伴うものであった。そのため、トムも何度も女性（およびその親族）の追跡を逃れようとしている。そうでありながら、トムが物語中で追われ続けながらも追っ手の追跡を逃げおおすことができ、話のなかで罰せられることがないのはなぜか。

おそらくその「鍵」は、物語のなかで、女性が性的な活動に主体的な行為者として参加しているかどうか、という点にある。この物語では、トムの徒弟先のおかみは、金銭目的のためか自ら娼館で客を取っているし、女学校のメイドにせよ生徒たちにせよ、損得勘定や好奇心も手伝って進んでトムに身を任せにやってくるように描かれている。

[寄宿学校のほかのメイドと関係を持つ場面。当時、同性の召使いは同じベッドで寝かされることが珍しくなかったが、トムが男性であることにそのメイドが気づいて大声をたてようとしたので]お願いだからそんなことはしないで、と言って、娘に優しくキスをし、さらに、実は自分はジェントルマンなのだが、君が一目で好きになってしまったのでこんな変装をしてまでここに潜り込んだんだ、あと3ヶ月もすれば21歳になって[財産などを]自分の好きなようにできるから、そしたら結婚しよう、とトムは口説いた。娘は、直前に恋人の夢を見ていてそういう気分を催していたうえに、ジェントルマンに見そめられるとは運のよいことだと考えたのでトムに同意し、二人はお互いが満足いくまで「お楽しみ」としゃれ込んだ。...学校の娘たちはついにトムの正体に気づくと、やれ、ベッドが冷たくて一人で寝るのは嫌だの、幽霊が恐くて一人では寝られないだのと言ってはトムをベッドに呼びつけた。そういうわけで、トムは娘たちをずいぶんと「突っつき回す」ことになり、そうこうするうち何人かは先生から身体を詳しく調べられ、ついに[妊娠が]明らかになった(part 2, 67)。

この場面からは、女性が性に対して積極的な行為者でありうることばかりでなく、あわよくばジェントルマンと結婚できるかもしれない、と考えるメイドの計算高さや、性行為がどういう結果を生むものであるかも十分に理解せず性交渉に臨もうとする女生徒たちの無思慮ぶりも読み取ることができる。そもそも初期近代イングランドのポピュラー・カルチャーにおいては、女性は「一旦処女でなくなると性的に貪欲になるもの」と類型化されて表象されることを指摘する研

究者もいる¹³⁾。この物語の女性の描かれかたもこの延長線上にある。つまり、登場する女性たちの妊娠は、自分のセクシュアリティを積極的に享受しようとした「罰」なのだからしかたがない、因果応報であるという理由でトムは免責されることになる。女性を無垢なものとし単に誘惑される対象であるとするよりも一層深い女性蔑視がここに見られるとも言える。

しかしその一方で、タイトルからして「愉快な物語 (the merry history)」であることから明らかなように、この物語が「笑い話」であることを前提として ^{オーディエンス} 読者 = 聴衆 がこの物語を享受していることに注目したい。この物語に「笑い話」というジャンルの「枠」が与えられているために、本来ならば悲劇的な状況にあるはずの、妊娠させられて捨てられる女性たちにも悲愴さがない。16人の乙女と未亡人がいっせいに村はずれに向かう場面にせよ、何人もの女学生の妊娠が校長に発見される場面にせよ、むしろドタバタ喜劇の一場であると言える。^{オーディエンス} 読者 = 聴衆 は、自分たちが享受している物語が「笑い話」=「道徳に反するもの」であることをあらかじめタイトルによって知らされているために、その内容を始めからまともに受けとるべきではないという受容の枠組みをもって物語に臨んでいたのではないか。別言すれば、トムの行動は現実であればおよそ容認されるべきものでない、という価値意識がそこに共有されていたと考えてよい。したがって、トムの行状にしても、それが物語のなかで見過ごされるのは、「笑い話」という枠内に収まっている限りにおいてのことだと言える。笑い話でない場合には、たとえば『森の中の魔女』という魔女の復讐物語では、トムと同じように何人もの村の娘たちに手を出して妊娠させた靴屋は、三人の魔女から散々に復讐されて、片目をつつき出されるといった罰を受けている¹⁴⁾。ベニー本の世界は、ぎりぎりのところで全くの「不道德」にはなっていない。

また逆に、「笑い話」であれば、常に既成の道徳が物語中で覆されているかということ、必ずしもそうとは言えない。たとえば、魔法のアイテムをもった小人ジャックの登場する『ジャック・ホーナーの物語』では、友人の妻が浮気をしている現場を押さえたジャックは、友人の替わりに、その妻と浮気相手を罰している。その罰しかたはスカトロジカルかつ朗らかに語られる¹⁵⁾。ジャックの友人の妻と一夜をともした「クェーカー」氏は、翌朝早くに室内の便器で用を足そうとする。隠れマントに身をつつんだジャックは前の晩からの一部始終を見届けたうえで、魔法を使い、男が便器から離れないようにしてしまう。

良妻夫人は声を上げて言った

「どうしてそんな寒いところに坐っているの」

答えて言うに「わしの腿の裏側にはりついて

どうにもこうにも取れんのだ」

女は言う「この人ったら何て馬鹿」

男にさっさと近寄ると

片手は男の道具を掴み

もう片手で便器をひっつかみ

カ一杯ひっぱった

そうすれば取れると思ったから (17)

しかし、便器は取れるどころか、この妻までいっしょにくっついてしまい、さらに、助けようとした女中もいっしょにくっついてしまうことになる。朝早くのことであり、三人とも、とても人前に出られるような身なりではない。ジャックは隠れマントに身を包んだまま、三人を連れて町を練り歩く。

ジャックは笛を吹きながら
階段から下へと降りて行った
キューカー、宿屋のおかみに、女中
みんな笛の音を聞いたとたん
音楽にあわせて踊り出す
三人どこへ行くかと思えば
通りのほうへと躍り出る
下着一枚、裸同然
ダンサーみたいに飛び跳ねる
膝まで泥に埋もれながら
高く跳ね上げればおまるの小便も高く飛び
頭の上やら耳にやら
ざあざあ上から降ってくる
まるで塩辛い涙のよう（18 19）

自らの汚物を浴びせられながら人目に立つように行進させられる「キューカー」氏とその相手であるジャックの友人の妻は、「結婚」に関する道徳の侵犯者として罰せられる。陽気な笛の音、滑稽な踊り、乱れた服装で便器を抱えたおかしい行進は、様式化されたポピュラー・カルチャーの制裁手段であるラフ・ミュージックを彷彿とさせる。二人が行動の自由を奪われているところも、シャリヴァリにおいて制裁を受ける当事者が馬の背などにくくりつけられるのに対応する。

「笑い話」が性的規範に対してつきつけるメッセージは、ときに既成道徳を踏み越えるトリックスターに対する反転した道徳観であったり、ときに哄笑と嘲笑の入り交じった祝祭的な空間における懲罰という様式的な形で表現される道徳であったりする。ペニー本の道徳は、「笑い話」におけるこのような複雑な（あるいは「ひねくれた」）形を取る場合ばかりではない。ペニー本の性的規範は、より直接的なメッセージとして伝えられることもある。次節では、主人公の女性が「結婚」という枠の外へと踏み外したために、強い道徳的非難を加えられる「メロドラマ」を題材としたペニー本を読み、「笑い話」との比較を試みる。

2. 「メロドラマ」のテキスト

『エドワード四世の妾妃ジェイン・ショアの一生と死』という本は、15世紀から16世紀にかけて実在した女性の物語である。ジェイン・ショアは、エドワード四世の妾として王に大きな影響を及ぼしたが、死後リチャード三世によって魔女として迫害を受け、貧窮のうちに没した。この

女性は17～18世紀にかけてバラッドの題材となって歌われたほか、18世紀の初頭には劇作家ニコラス・ロウによって悲劇のヒロインとされ、1714年に発表された¹⁶⁾。バラッドにせよ当時の舞台にせよ、ペニー本はそれらの「流行もの」に題材を得ていることが多い。ジェインの話はいずれかのルートでペニー本として出版されるようになったものであろう。やはり簡単に内容を見ることにする¹⁷⁾。

ロンドンの織物商トマス・ワインステッドは、美しい娘ジェインをとてかわいがっていたが、娘が15歳になると、その美しさに目をつけ、妾にしようと狙う貴族がたくさん出てくるようになった。その状況に心を痛めた父親は、結婚させれば言い寄ってくる者もいなくなるだろうと考えて、裕福な金細工師マシュー・ショアと結婚させた。ヘイスティングス卿という貴族はかつてジェインに言い寄って父親から家への出入りを差し止められていたが、その手引きでエドワード王がお忍びでショアの店を訪れ、そこで見たジェインの美しさと機知に心を奪われて我がものにしようと企む。ジェインの近くに住む女性を金品で抱き込んで味方につけ、ジェインはその女性からもあらためて説得されて、ついに、自分を妾妃に迎えようとする王の意向に添うことにして家を出て、宮廷に行く。ショアは妻が帰ってこないの方々を探すが、ジェインがみずから進んで王のもとへ向かったことが分かったと、落胆のあまり全財産を売り払って外国へ行き、長い年月のあと落ちぶれ果てて帰国し、失意のうちに死ぬ。ジェインは王の寵愛を受け栄華を極めるが、驕り高ぶることなく貧しい人びとにも親切に振るまった。また、王に対して大きな影響力を持っていたので、王の不興を買った多くの人びとを助けもした。

しかし、王が崩御したのちにはヘイスティングス卿に囲われることになり、卿を陥れる口実として、次の王リチャード三世は、ジェインが魔女だと言いがかりをつけ、ジェインをかばったヘイスティングスを死刑にする。ジェインはリチャードによって捉えられ、素足、白装束で懺悔行列をさせられたうえ、リチャードは、だれもジェインに宿を貸したり食物を与えたりしてはならない、という布告を出す。リチャードがボツワースで倒れ、ヘンリー七世の世になったので、事情は好転するかと思われたが、ヘンリーはエドワード四世と王妃とのあいだの娘を王妃にし、この王妃が父の妾であったジェインを激しく嫌ったため、同様の布告を出した。ジェインは老齢になるまで困窮の人生を送り、どぶのなかで死んだと言われている。

以上の要約を参考に、「結婚」という規範への違反という観点からこのテキストを見るとどのようなことが分かるだろうか。基本的な枠組みとして、この物語においては「結婚」に絶対的な価値が置かれており、そこからの違反は非常に強い道德的非難に値するものとされる。晩年ジェインが塗炭の苦しみを嘗めるのは、そもそも王の妾妃となったことが原因であるように描かれ、いわばジェインの性的不道德に天罰が下されたと言わんばかりの書きかたがされている。この点に、このテキストの「語り」の道德的態度が顕著に表れる。夫を捨て王の妾になったという一点を除けば、ジェインは基本的に弱いもの、貧しいものの味方であり、そういう人びとのために王に便宜を図ってもらうように取りはからうなど、普通ならば高い評価を与えられてしかるべき登

場人物である。しかし、王の妾となったばかりに、筆舌に尽くしがたい辛苦に満ちた生活を、しかも長年にわたって送ることになっている。物語の最後をしめくくる、絶命直前のジェインの後悔と懺悔、そして虚栄に走る人びとへの戒めの言葉に、このテキストの道德観が端的に表れている。

あの豪華絢爛たる、栄光に輝くエドワード王の宮廷には、もはや身を置こうと思いません。いいえ、わたしは王の腕に身を任せていた、どんなときよりも、ごみの山に暮らす今のほうが幸せです。ああ、あれは、何という不義の床であったことでしょう。王は何という悪党であり、わたしはあの悪党によってどれほど迷わされたことでしょう。わたしの罪がどれほどの悲しみの洪水を引き起こしたことでしょう（23 24）。

ここでは、ジェインを理不尽に自分のものにしようとした王に対しても、ジェインの口を通して強い非難が向けられている。一方、正当な結婚（ジェインの父親が決めたものではあるが）による夫であるショア氏は、妻を陥れようとする奸策を防ぐことができなかったにせよ、このテキストの語り手は決して非難を加えようとはしていない。ポピュラーカルチャーで往々にして「寝取られ亭主」として揶揄の対象になる立場にあるはずのショアには、むしろ哀れみの視線が向けられている。

ペニー本『ジェイン・ショア』に特有のこのような道德観は、ジェインを描いた物語の別のヴァージョンとの比較によって明らかになる。1714年にロンドンで出版された『ジェイン・ショアの生と死』という本では、王もジェインもともに非難の対象になっておらず、王の漁色でさえも「それほど多くの人びとを苦しめたわけではなかった。それは、大勢の人を不快にさせるほど酷いものではなかったし、暴力を伴うことがなかったからだ」と説明されていて¹⁸⁾、ジェインの描写もトマス・モアの手による歴史書にもとづいていて客観的な装いをしている。ページ数こそ24ページと、ペニー本と同じであるが、版型（約21.5cm×15cm）、文体、挿絵の不在などから考え合わせると、想定される読者は、リテラシーの点でも経済的な点でも、ペニー本よりも上の層だと推測される。この語りにおいて強調されるのはエドワード王没後のリチャード三世の悪行ぶりであり、また、歴史の流転のなかで翻弄されるジェインの悲劇である。ジェインは、まさに「悲劇のヒロイン」であって、ここで強調されるのは人の世の有為転変である。これに比べると、ペニー本『ジェイン・ショア』の困窮ぶりは、夫を捨てて王のもとに、しかも妾となるべく走ったジェインに下された「罰」としてくっきりと描かれている。

ジェインと同様に、王の妾であったがやはり非業の死を遂げる（この場合は女王の怒りを買ってであるが）女性を主人公にしたものとして、『美しい口ザモンドの生と死 - ヘンリ - 二世の愛妾がエレノア女王によって毒殺されるさまを描く』という物語がある¹⁹⁾。これもやはりドラマティックな側面を押し出したメロドラマで、これらの物語がメロドラマとして成立しうる前提は「結婚」に置かれた価値の大きさにある。「結婚」が価値的に捉えられて、その価値に侵犯したためにヒロインたちが苦しむという道德的な構図がなければ、このメロドラマは成立しない。逆に言うと、メロドラマの中であるからこそ、王の愛妾たちはさまざまに苦しめられているのだと言えるだろう。

一方、王侯貴族を扱ったものであっても、「笑い話」であるという「枠」が与えられている場合には、その行状が不品行なものであっても、テキストの語り手によって非難が加えられることはない。『ジョークにジョークを重ねて』という笑話集は、チャールズ2世と、その宮廷に出入りしていた貴族や妾たちが主な登場人物であるが（これは史実とはほぼ全く関係がない）、ここに登場する女性たちは大らかに性について語り、あるいは男性に逆ねじを食らわせる。この本には「ダブル・アンタンドル」（言葉遊びの一つで、複数の意味を持つ言葉を用いて、表面上の意味とは異なる性的な含みを持たせる表現）が多用されていて、それを訳出するのは困難だが、この本を代表する性格を持つ一つの小話の「表」の意味だけを訳すと次のようになる。

チャールズ2世が貴族たち数名と干し草作りをしていた。[王の愛妾の]ネル・グウィンが立ったままそれを眺めているので、王が「ネル、おまえはどうして干し草作りをせんのだ」と言うと、ネルはそれに答えてこう言った。「陛下と貴族のみなさまがたができるだけ干し草の山をお作りいただいたら、私がみなさまのために全部それをならしますわ。」（...Quoth the King, So Nell, why don't you make Hay? To which she replied, If your Majesty and Nobles will cock as much as you can, I will spread for you all. ³⁰⁾

王侯貴族が干し草づくりをする、ということからしてすでに「ありえない」話ではあるが、ここで、'cock' に「干し草の山を作る」と「勃起する」の意が、'spread' に「広げる、ならす」と「身を投げ出す、横たわる」の意味があることを押さえれば、強い性的放縱の含みを持つ「もう一つの意味」はおのずから明らかであろう。

ここでは、王の妾であるグウィンは、何ら道徳的非難の対象にはならず、むしろ堂々と自らのセクシュアリティを宣言する主体としてこのジョークでは描かれる。おそらく、およそありえないようなこのシチュエーションは、オチである最後のダブル・アンタンドルを思いついた人間が、ジョークを成立させるために無理矢理に作ったものではないかと推測されるが、いずれにせよ、ここには、結婚という制度の外にいる妾が不幸でなければならないとする「道徳」は働いていない。このような「道徳」からの免除は、『不埒なトム』の場合と同じように、一般的な道徳観念が通用することが期待されていない「笑い話」という物語世界の内部だからではないか。さらに念を押しておけば、そのような世界ででもない限りは、例えその相手が王侯貴族であっても、「結婚」の枠組みの外に存在する「妾」はジェインやロザモンドのように強い非難の対象になったと言える。

「笑い話」と「メロドラマ」とでは、一見したところ性と結婚に関する道徳観が両極端とも言えるほど異なっているように思われるが、前節で論じたように、「笑い話」はそれが笑い話であると宣言されている限りにおいて、既成の道徳を再確認する働きを持つとも言える。一方でメロドラマは結婚をめぐる性的規範の侵犯のためにヒロインが不幸に落ちるという構造を持ち、より直接的に道徳の強化＝教化を計るものだと言うことができる。次節では、基本的には「笑い話」の一種として既成の道徳が適用されることを拒否しつつも、その笑い話の主人公が女性であるために、メロドラマと同様に、性に関する秩序（とくに性役割について）への服従を余儀なくされる、といったやや複雑な構造を持つ物語を検討する。

3．女傑物語のテキスト

初期近代から現代にかけてのバラッドやペニー本、大衆演劇などにしばしば見られた「男装の女傑（woman warrior）」をめぐる物語は、性役割がポピュラー・カルチャーのなかでどのように捉えられていたかを考えるうえで興味深い材料を提供してくれる。このような女性戦士は「結婚」という枠組みとどのように関わるのだろうか。

ヘンリー八世の御代、6フィートを越えるというその背の高さから「背高メグ」と呼ばれる娘がランカシャーにいた。18歳でロンドンに奉公に出てきたメグは、ウェストミンスターの「鷲」亭という宿屋で女中として働くことになる。実在の人物をモデルとしたこの物語の全体を眺めておこう²¹⁾。

「鷲」亭で働くメグは「ウェストミンスターの背高メグ」として腕力の強さで有名になる。支払い能力があるのに食い逃げをしようとするものには容赦しなかったが、いつも弱いもの、貧しいものの味方だった。メグの友だちが二人の追いはぎから襲われているところに出くわしたメグは、自分と勝負して、負けたら一行から奪った金品をすべて返せ、自分が負けたら自分の服もくれてやる、と賭けをして二対一で闘うが、それぞれ一撃で地に這わせてしまう。命乞いをする追いはぎたちにメグは、女性、あるいは女性連れ、体の弱っている者、子ども、他人の荷物を仕事で運んでいる運び屋を襲わない、という条件を出して逃がしてやった。しかし、貧乏人が苦しみのは金持ちのせいであるから、金持ちからは金を奪ってもよい、とメグは言う。

当時、ヘンリー八世はフランスと戦争をしており、ウェストミンスターにも徴兵吏が来た。メグと同じ店で働いている馬丁が連れて行かれそうになるが、騒ぎを收拾しに来た軍人にメグは剣技を披露し、馬丁の代わりに自分が行く、と言って従軍する。海を渡ったヘンリーはブロンを制圧し占領部隊を置く。夜中にフランス皇太子の率いる奇襲部隊に襲われ大混乱に陥るが、洗濯女として夜遅くまで働いていたメグが女たちを組織して、市壁から石や熱湯を浴びせかけて、市内の部隊が体勢を整えるまでの時間稼ぎをする。さらに部隊が敵を追い払うときの先頭に立って働き、王からも認められる。市を包囲するフランス軍から、腕に自信のある兵士がイギリス軍を挑発に来たのをメグが受け、長い格闘の末に相手を倒す。フランスでの戦争が終わるとメグはウェストミンスターに戻り、そこである兵隊と結婚する。夫はメグの「男らしさ」を試そうと闘いを挑むがメグは頭をたれて殴られるままになり、夫の許しを乞うて従順を誓った。その後メグは、自分の宿屋を持つようになり、そこでの規則を定めた。例えば、食事をしておきながら金がないという客はメグから殴られること、金がなくて飢えているものには無料で食べさせてやるし、職業に応じて金も持たせてやること、大騒ぎをして出て行こうとしない客はメグから殴られること、などであった。このような規則があったので、メグのパブは静かだという評判だった、として話が締めくくられている。

この物語はペニー本のなかでよく読まれたもののようで、今回用いた版はニューカッスルで出版された、年代不詳のものであるが、18世紀の20年代に活動していたノリスという印刷出版業者も、世紀中葉に活動していたダイシーとともにロンドンでこの本を出版している。文献初出は不明であるが、書籍商組合への登録は1590年のことだという²²⁾。筆者は、1635年にロバート・バードという本屋のためにジョン・ピールという印刷業者が出版した、30ページ余の四折本を確認している²³⁾。

ある研究者によると、「男装して闘う女性戦士」という表象は、初期近代の文学や戯曲を始めとして、バラッドやブロードサイドなどのポピュラー・カルチャーのアイテムのなかで一つのジャンルをなして、17世紀初頭から19世紀末までのバラッドのなかでこの範疇にはいるものが100を越えるということである²⁴⁾。このような女性性は性的役割に関する当時の規範意識に抵触するが、それに関わらず、その活躍は初期近代のポピュラー・カルチャーのなかで一定の人気を得ていた。このジャンルの先行研究をまとめると大きく二つに大別され、一つは、こういう女性たちが闘いに赴くのは夫や恋人を救うためであることが多く、ハッピーエンドは結局無事に結婚することにあるのだから、これらの物語は所詮は家父長的な性役割の確認に終わっていたのだ、とする見かたであり、もう一つは、その冒険の過程における家父長制や男性優位の社会に対する挑戦こそが重要なのであり、それは性役割に関する意識に対する挑戦である、という見かたである²⁵⁾。そのような研究史を念頭においたうえで、『背高メグ』の物語をどのように捉えればよいだろうか。

メグが常に貧しいものや弱いものの味方である点を捉えて、ある研究者は、「Megの行動は、規制制度の下で憂き目を見ている社会的弱者を、生活者の立場から救済するという点で首尾一貫している」として、メグの行動を社会に暴利をむさぼるものに対する「代執行」だと解釈する²⁶⁾。メグが社会的弱者の代弁者であることは否定しえないにしても、メグの闘いの場面が、敵味方合わせて酒場で仲直りの宴会をしたり、女性であることが分かってその場の人びとが大笑いしたりして幕となる終わりがたが圧倒的に多いことを考えると、性的役割を侵犯するトリックスターとしてのメグの役割を重視するほうが妥当ではないかと思われる。酒と哄笑の祝祭的空間はトリックスターの領分だからである。

トリックスターとしてのメグが性役割に抵触していると思われる場面を検討すると、大きく言えば、第一に男性に対する圧倒的な肉体的強さ、第二に男装とその解除が挙げられる。物語を通じてメグは全戦全勝であり、ペニー本の男性ヒーローたちが、たいてい一度は捕えられたり負けたりすることがあるのに対して、メグは不敗のヒロインである。無銭飲食の客を叩きだす、横暴な役人を殴りつける、というような場合だけでなく、遊びで男装して町をうろついて喧嘩をする場合であっても負けることはない。また、闘いの場面でしばしば男装しているメグは、闘いが終わってから帽子や髪とめを外して長い髪をなびかせ、それによって周囲の人間にメグが女性であることが知れる、という場面が何度かある。ここでは「長い髪」が女性性のシンボルとして描かれる。また、メグが女性であることが分かる場面は、哄笑や拍手喝采で終わるのが普通であり、そこに ^{オーディエンス} 読者＝聴衆 のカタルシスを感じ取ることができる。

しかし、このような性役割に対する侵犯にもかかわらず、メグが女性であることは繰り返し語られる。「驚」亭に雇われるときに、その場にいた男性の一人は、メグはここよりも王のもとので

雇われるべきだといい、その理由を尋ねられて、王のために頑丈な兵士をどんどん産ませるためだからだと言う。ここでは、「繁殖させる」という意味で‘breed’という単語が使われていて、人間に関して使わない言葉ではないにせよ、動物的な含みがないとは言い切れない。また、追いはぎがメグと賭けをして闘うときに、「それほど威勢のいいことを言うのなら、お前をさんざん殴ったあとで、下着姿の裸同然の格好で追い返してやる」²⁷⁾と言う台詞には、エロティックな期待が込められていると考えてよいだろう。

そして、性役割の観点から見たときにこの物語のなかで最大の問題点となるのは、前述の論文のなかで「家父長制社会の『検閲』」と評された、メグが結婚したときの場面である。先にも触れたように、兵隊である夫はメグの評判を聞いていたので、メグの力を試そうとして闘いを挑む。そのとき、夫は、

メグを奥の部屋に呼ぶと、服を剥いでペチコート姿にさせて棍棒を渡し、自分も棍棒を取ると...お前の力を試すから自分と闘えと告げた。これに対して悲しそうな顔をしたメグは頭をたれて攻撃せず、夫が三、四発殴ると、膝をついて、殴るのをやめてくださいと許しを乞うた。どうして闘わないのかと問う夫に対して、これまで誰に何をしていたにせよ、「背高メグが夫の主人だ」とは絶対に人から言われぬようにします、わたしのことはお好きなように扱ってください、と言った。それ以来...二人は喧嘩一つしたことがなかった。
(20)

闘うにあたって衣服を脱がせるのは、それまでの闘いでメグが男装したのと正反対であり、メグから男性性を奪おうとする行動だったと言える。懲罰的な含みがあったようにさえ思われる。この箇所は、確かにこの物語の「揺らぎ」であり、戦場のような極限の状況下でさえ男性に対して優位を保ち続けていたメグが、自ら闘いを放棄して男性の支配に進んで屈しようとするのはいかにも一貫性を欠くように思われる。さらに問題を複雑にするのは、ペニー本の世界には、がみがみと夫を叱りつけ、場合によっては暴力で支配しようとする妻の登場する物語がめずらしくないことである。そうであれば、メグが口うるさい「おかみさん」となっても不思議ではないかもしれない。しかし、普通の女性であればともかく、夫を尻に敷く妻という役割を「無敵」のメグに与えることは、読者＝聴衆^{オーディエンス}が無意識に感じていたであろう、夫婦間の力関係に対する規範意識を根本から脅かす。外部の敵に対しては、それが警官であろうと役人であろうと、あるいは敵国の兵士であろうと勝ちつづけたメグも、ペニー本が要求する規範のなかで夫に勝つことだけは許されなかった。

メグのこの側面だけを取り上げて、この物語が家父長制を結局は擁護しているのだと結論づけるのは偏っているだろうが、さりとて、明らかに違和感を感じさせるこのエピソードを無視するわけにもいかない。「背高メグ」は自明と考えられがちな性役割に対して棍棒と剣で殴り込みをかけつつも、夫の前だけでは「従順な妻」としてその役割の要求に答えている。しかも、メグの夫はこのエピソードだけに登場して、結婚後であるはずの話にもいっさい登場しない。メグに「妻」という役割をおしつけるためだけに登場するようにも思われるし、逆に、その不在ゆえにメグへの性役割の押しつけは最小限にとどまっている、ということもできる。いずれにせよ、夫

ペニー本は「不道德」か？：初期近代イングランドの民衆出版物に見られる性道德のエピソードはこの物語が当時の性役割に関する規範をすっかり覆してしまうのをおしとどめる機能を果たしていると言える。

こうして、『背高メグ』は最終的なところで男性優位の価値観を打ち負かすことはできなかった。それは、別の言い方をすれば、この物語が、女性を劣位に置くことを要請するエリート・カルチャーの道德観に添っていたということであり、その限りにおいて、同時代人に「不道德である」と言われるようなものではない、ということである。もちろん、表面的には、多くの男たちを殴りたおし、ときには相手の男を袋に入れて吊るし上げまでするメグを「女だてらに」と非難することは可能であろうが、家庭内での夫婦の力関係という点で、もっとも基本的な、ある最終ラインを越えることをメグはついにしなかったのである。

結びにかえて

冒頭で見たように、ハンナ・モアのような社会改良家たちはペニー本を強く非難した。現代の研究者にも、ピーダセンのようにペニー本は「話題は多様であっても、雰囲気はまったく不逞でしばしば非道德的である点では一致している」とするものもある²⁸⁾。しかし、本稿で示してきたように、ペニー本はテキストの表面では当時の道德に抵抗しているかのように見えながらも、それは、飽くまで「笑い話」といったジャンルの「お約束」であり、それが笑いの対象となるには、基本的な道德観が共有されている必要がある。また、歴史上の人物を題材にした悲劇では、結婚に関する道德が露骨なまでに登場人物に押しつけられていた。さらに、明らかに性役割を侵犯すると思われる「女性戦士」の物語にしたところで、その侵犯そのものが ^{オーディエンス} 読者＝聴衆 の哄笑を誘うものであったとしても、主人公は結局のところ家父長的な価値観に打ち勝つことはできなかった。

同時代の社会改良家にせよ、現代の歴史家にせよ、ペニー本が当時の中上流階級が押しつけようとする道德に対して敵対的であると論じる場合、エリート・カルチャーに対するポピュラー・カルチャーの挑戦であると捉えている。しかし、ペニー本の世界が提示する道德観はその本質において、社会のメインストリームの道德とそれほど異なったものではなかった。初期近代イングランドのポピュラー・カルチャーがエリート・カルチャーに対して持ったとされる「抵抗勢力」としての力を過大評価する危険性については自覚的でありたい。ポピュラー・カルチャーが本質的に持つ保守的な性質に十分に目を向けなければ、この時代に存在した複数の文化の間にあった関係を正しく理解することはできないだろう。また、ペニー本の表象の多様な姿が、等し並にすべてを「卑俗で淫ら」とか「非道德的」といった言葉で切り捨ててしまえないものであることも確認しておきたい。

最後に本稿の限界を二点指摘し、今後の展望を示しておく。第一に、本稿で扱うことができたものは百数十点を越える18世紀のペニー本のなかでもほんの一部である。川島昭夫も指摘するように、ポピュラー・カルチャーの印刷物のなかでペニー本の持つ意義を過大評価することは避けたいが²⁹⁾、ペニー本のテキスト分析を通じて、その多様性を明らかにするとともに ^{オーディエンス} 読者＝聴衆 の価値観を探ろうとする試みは、18世紀イングランドの文化を研究する上で、一定の意味を持つ作業であるに違いない。たとえば、ペニー本の ^{オーディエンス} 読者＝聴衆 が抱くヒーロー像

や、「秩序」や「体制」といった概念に関する価値意識なども、いまだ十分な検討の対象とされてはいない。純粹に扱っているテキストの「量」の問題として、本稿の不充分さはむしろ言うまでもない。第二に、ペニー本の提示する性的規範が保守的なものであることについて、本稿でその原因が充分に議論されているとは言えない。これは、ペニー本の「消費」のありかた、^{オーディエンス}読者＝聴衆の性別、階級、年齢構成などについての研究が進んでいないことにもよるが、ポピュラー・カルチャーのほかのアイテムとの整合性など、さらに検討されるべき論点は数多く残されている。今後の課題としたい。

註

- 1) Victor E. Neuburg, *Popular Literature: a history and guide* (Harmondsworth: Penguin Books, 1977) p.255.
- 2) 一般には「チャップブック」と称されることの多い、近代イングランドに広く流布していたとされる小冊子群を指す。筆者は「チャップブック」という用語を避け、これまで「行商用小冊子」「物語集」などの言葉を用いてきたが、いずれの表記法にも問題点が残る、ここでは当時使われた 'Penny Histories' という語を訳して「ペニー本」という語で示すことにする（ここでの 'histories' は「物語」の意である）。
- 3) Susan Pedersen, 'Hannah More Meets Simple Simon: Tracts, Chapbooks, and Popular Culture in Late Eighteenth-Century England', *Journal of British Studies*, 25 (January, 1986) 84-113. (pp.97-98)
- 4) ペニー本の読者がどのような社会階層であったかについては、必ずしもそれを「民衆」に限ることはできない。少なくとも中流階級の男児がペニー本を読んでいたらしいことは、ジェイムズ・ボズウェルの日記などから明らかであるし、古典的教養への言及などで、読者にある程度以上のカルチュラル・リテラシーを要求しているように思われるものも少なくない。したがって「ペニー本の読者＝民衆」という等式は成り立たないのだが、ここでは、モアの認識に基づいて議論している。
- 5) ブリジット・ヒル（福田良子訳）『女性たちの十八世紀 - イギリスの場合』（みすず書房、1990年）、47ページ。
- 6) ロイ・ポーター（目羅公和訳）『イングランド18世紀の社会』（法政大学出版局、1996年）、35ページ。
- 7) 同書、32ページ。
- 8) ここでは、中上流階級の行動規範となる文化を、ラングフォードにならって「上品な文化」(polite culture)と呼ぶ。カナ書きを用いることもある。Paul Langford, *A Polite and Commercial People: England 1727-1783*. (Oxford: Oxford UP, 1989). を参照のこと。
- 9) *Wanton Tom: or the Merry History of Tom Stitch, the Taylor*. 2 parts (London: Printed and Sold in Aldermay Church-Yard, [n. d.]). なおダイシーという印刷出版業者については、佐藤和哉「『ヒストリー』は『物語』か『歴史』か ダイシーの出版物カタログをめぐって」『英米文学研究』第37号（2002）23-35ページを参照。
- 10) フランスの事例であるが、このような種類の出版物がどのように消費されるものであるか、については、ロベール・マンドルー（二宮宏之・長谷川輝夫訳）『民衆本の世界 17・18世紀フランスの民衆文化』京都：人文書院、1988年、25ページ。
- 11) 「読み上げられる」本であったことがペニー本の一つの特徴であるので、これを享受するものは「読者」とであるとともに、それを聴く「聴衆」でもある。ここではそれらを総称して「読者＝聴衆^{オーディエンス}」と呼ぶことにする。
- 12) Robert B. Shoemaker, *Gender in English Society, 1650-1850* (London and New York: Longman, 1998), p.98.

- 13) Susan Dwyer Amussen, 'The Gendering of Popular Culture during the Early Modern Period', in *Popular Culture in England, c.1500-1850*, ed. by Tim Harris (London: Macmillan, 1995), pp.48-68, (pp. 56-59).
- 14) *The Witch of the Woodlands: or, the Cobbler's New Translation* (London: Printed by and for T. Norris, and sold by E. Midwinter, [n.d.]).
- 15) *The History of Jack Horner. Containing, The Witty Pranks he play'd, From his Youth to his Riper Years* (London: Printed and Sold in Aldermay Church-Yard, Bow Lane, [n.d.]).
- 16) Margaret Drabble, *The Oxford Companion to English Literature*. 5th edition (Oxford: Oxford University Press, 1985) 'Shore', 'Rowe'.
- 17) *The Life and Death of Mrs. Jane Shore, Concubine to Edward IV* (London: Printed and Sold in Aldermay Church-Yard, Bow Lane, [n.d.])
- 18) *The Life and Death of Jane Shore; Containing the whole Account of her Amorous Intrigues with King Edward the IVth and the Lord Hastings: Her Penitence, Punishment and Poverty* (London: J. Roberts, 1714) p.3.
- 19) *The Life and Death of Fair Rosamond, Concubine to King Henry the Second; Shewing [sic] her being poisoned by Queen Eleanor* (London: Printed and Sold in Aldermay Church Yard, [n.d.])
- 20) *Joaks upon Joaks; or, No Joak like a true Joak*. (London: Printed and Sold in Bow-Church-Yard, London. [n.d.]) p.19.
- 21) *The Life and Adventures of Long Meg of Westminster; containing the merry Pranks she played in her life time...* (Newcastle: [n.p.], [n.d.]).
- 22) Bernard Capp, "Long Meg of Westminster: A Mystery Solved." *Notes and Queries* New Series No.45 (September 1998) p.302.
- 23) *The Life of Long Meg of Westminster: Containing the mad merry pranks shee played in her life time, not onely in performing sundry Quarrels with diuers Russians about London: But also how Valiantly she behaued her selfe in the Warres of Bolloingne* (London: Printed for Robert Bird, 1635).
- 24) Dianne Dugaw, *Warrior Women and Popular Balladry, 1650-1850* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989) p.2.
- 25) *Ibid.*, p. 4.
- 26) 佐藤 光「チャップ・ブックの女性像 *Long Meg of Westminster*を読む」京都大学大学院英文学研究会『Zephyr』9号(1995年11月)71ページ。
- 27) *The Life and Adventures of Long Meg*, p.14.
- 28) Pedersen, p.103.
- 29) 川島昭夫「英国の路上文学」(中島昌彌編『ポピュラー文学の社会学』, 世界思想社, 1994年、所収) 214ページ。